



守 永 英 子

子どもとことば

岡本夏木著 岩波新書

私は本を買うことが好きである。新聞の新聞案内や書評を切り抜いておいたり、ふらりと書店に立ち寄ったりして本を買ひ込む。しかし己れの力に余る向学心（？）のせいか、選ぶものは少々堅く読む方はなかなかはかが行かない。次第に机の上やベッドのまくらもとに本が積みあげられて行く。つまり、あまり適任とは思われない積読家のささやかな読書のなかからの図書紹介である。

子どもがいつのまにか、ことばを話すようになることを、私たちおとなは、自然で当り前のことのように思っている。しかし、「話せないもの」が「話すもの」になっていく過程は、子どもの側にたってみるかぎり、一つの大きい戦いであると著者は言う。

子どもはなぜある時点にいたらないと、いわゆる

ことばを話しはじめないのだろうか。その時点にいたるまでに、子どもの心のなかにはいったい何がおこっているのだろうか。ことばの獲得は何をその基礎工事として「必要」としているのか。そのことがここでの問題であり、本書のテーマのなかでも、もっとも重要なものとなるはずである——ここで私の興味は、ぐっとかきたてられる。子どものことばについて私が知りたいことは、統計的な平均値などではなく、まさにこのことなのだから。

私たち教育現場の人間は、ひとりの人間としての子どもと向き合っている。一つの側面からだけ光を当てた専門家の研究は、現場感覚にはピタリとこないことが多い。著者は「ことばの発達」という限られた側面からでなく、子どもの全体的な発達のなかでのことばの獲得のしくみを浮きぼりにしてくれる。外からの刺激としてのことばを、そのまま機械的に写しとっていくのではなく、人びとのかかわりあいのなかで子ども自身が自分の能動的な活動を

とおして自分のものとしてゆくことは感動的である。追跡研究の資料もおもしろく、「ニャンニャン」の記号化過程など興味深い。

著者の視点は、さらに、ことばが氾濫はんらんしている現在の社会状況、文化状況と、子どものことばの問題にひろがっていく。著者が示している「言語の繁栄」現象のなかでの「ことば」と「人間の心」の乖離かいりの問題は、教育にたずさわる者が深く考えなければならぬ大きな問題であろう。

### 新しい育児と教育

——在アメリカ精神科医の提言——

中久喜雅文著 弘文堂

日本とアメリカという二つの国で、家族とともに日常生活（友人とのつきあい、子どもの育児や学校生活への関与など）を体験し、両国で精神科医としての研究と精神的診療を行なってきた著者の、両文化についての洞察である。しかし、ただ文化の差

異についてではなく、精神科医とし、そのうらにひそむ心理的意義を精神分析的に検討し、ことにそれを乳幼児の育児、教育などとの関連においてとらえた点に興味をそそられる。

全体の構成は、一、文化のちがひ 二、心理のちがひ 三、精神病理のちがひ 四、精神療法のちがひ 五、日本文化とアメリカ文化の統合をめざしてとなっているが、はしがきにもあるとおり、例が多く平易な日本語で書かれていて読みやすい。「他」を知ることは、より深く「自」を知ることにもつながる。アメリカと比較洞察することで日本における育児、教育を考えなおすきっかけにしたいものである。

### 少年期の心——精神療法を通してみた影——

山中康裕著 中公新書

何年か前に読んだ本であるが、図書紹介をといわれるとなぜか心に浮かぶのは読んだあとのさわやか

さのせいであろうか。

この本は、精神科医としての著者が、精神療法という仕事を通してかかわってきた少年や少女（七歳から十五歳）の記録であるが、著者のクライエントに対する人間としての尊敬と愛情が、この本を医師の症例報告に終わらせていない。著者は精神症児たちに暖かいまなざしをそそぎ、神経症や精神症患の大きな部分はその個人の所属する「場」の持つ病理のしわよせの結果出てきたのだという考えを支持する。彼等は家庭や社会、つきつめて言えば、ひとつの時代を映し出す鏡であり、次の時代を考えていくのに一つの大きな指針を与えてくれる貴重な「生き証人」と考えるのである。

それぞれのケースはかなり特殊にみえながらも私たちが心ひかれるのは、著者が言うように、「実はみんながこうした要素を自分の中の「影」として含んでいるものだから」なのであろうか。興味深く読める本である。（お茶の水女子大学附属幼稚園）